ヴィクトリア朝における紡績機
――オールダムから大阪へ――

松村 昌家

1　マンチェスターとオールダム

ディケンズやギャスケルの世界に入り込んでいれば、ロンドン、マンチェスターは言うに及ばず、オールダム（Oldham）を抜きにするわけにはいかない。時にはオールダムをマンチェスターの中に入れ込むこともあるが、その点では注意を要する。1851 年 8 月 23 日付の *The Illustrated London News*（*ILN*）の “The Machinery Department of The Crystal Palace” の見出し付きの記事に目を通してみよう。1851 年 5 月 1 日に開幕した水晶宮（ロンドン万国博覧会）における機械部門の光景を報じた *ILN* の一部分である。万国博の企画を推進すべく王立委員会は、一つの基本的方針として、優秀な出品者に対しては褒章のメダルを贈呈する制度をとり入れることになっていた。そこでその結果はというと、最も誉れの高い “Council Medal”（評議員賞）を勝ちとったのは、ヒバート及びプラット父子綿紡績機械工場の面々で、全員がオールダムのハフォード製作所の職員であった。まさにオールダムはマンチェスターを凌いで一足先んじた感があった。

2　1862 年ロンドン万博とオールダム

1851 年のロンドン万博は 10 月 11 日を以って大成功のうちに幕を閉じ、それから 10 年後、1862 年に 2 度目のロンドン万博が開催された時には、日本から岩倉使節団を招聘し、かつ日本製品の展示をあらゆる面で好意的に受け入れた。また一行の英国回覧と欧州見聞を世話するなど、まさに日英交流の進展がここに始まったのであった。

1851 年万博に登場して名をあげたオールダムのプラット社は、新たに「プラット兄弟社」（Platt Brothers & Co）の看板を揚げて、ここに再登場し、万博の機械部門には、オールダムのプラット兄弟社製 13 種の綿紡績機を展示したのである。この 1862 年の万博における紡績機が縁となって、明治日本は、オールダムとの

交流を熱望するようになり、またその交流は急速に進展するのであるが、オールダムというのは一体どのような都市であったのか。それを少し見てことにしよう。オールダムはイングランド西部ランカシャーの都市にあり、1778年頃には6台のささやかな紡績工場と一つか2つの炭鉱（Collieries）があった。そして驚かされるのは、ヴィクトリア朝都市研究の大御所、Asa Briggsによれば、コークタウンは実はオールダムであったと言うことだ（注）。言い換えれば、ディケンズの『ハード・タイムズ』で知られたコークタウンはオールダムに変わり、オールダムにあったという2、3個の炭鉱は、『ハード・タイムズ』におけるスティヴン・ブラックプールにとっての「古い地獄のタテ坑」（the Old Hell Shaft）になっているのである。

3　「プラット兄弟社」と薩摩藩との出会い

1862年のロンドン万博における綿業機械展示第7部門、セクション9の部には、紡績並びに紡績製造用機の陳列があり、そこにはプラット兄弟社製13種の紡績機が並べられていた。この光景に最も魅了されたのは、おそらく松木弘安――のちの寺島宗則であった。

松木は蘭方医で、薩摩藩主島津斉彬の信を得ていた。その藩主があるときに英国製の一かせの紡糸に触れて、早速側近に研究を熱心にすすめたが、1858年に斉彬は空しく世を去った。しかし彼の遺志は、島津忠義に受けつがれた。1865年3月に、新納刑部、町田民部ら15名をイギリスへの秘密留学生に選び、寺島宗則、五代友厚ら4名が引率者として、オールダムへ向った。

彼ら一行が目ざしたのは、オールダムにプラット兄弟を訪ねて一万ポンド分の紡績機械を注文し、英国人技師7名を招聘することだった。

その目標は幸いにも見事に到達された。そして1866年11月には鹿児島磯の浜に、薩摩藩営としての紡績工場建設が始まり、1866年5月にそれは完成した。日本における紡績工第1号の細井和喜蔵による自伝小説『女工哀史』（1954）の一節を引用しよう。

> わが西洋式紡織業の嚆矢（こうし）は嘉永、安政の幕末時代で、薩摩の藩主島津斉彬が一代に卓越した識見と英断とによって英国オールダム市のプラット・ブラザーズ会社から紡機三千錘を輸入し、これを（中略）鹿児島市を去る

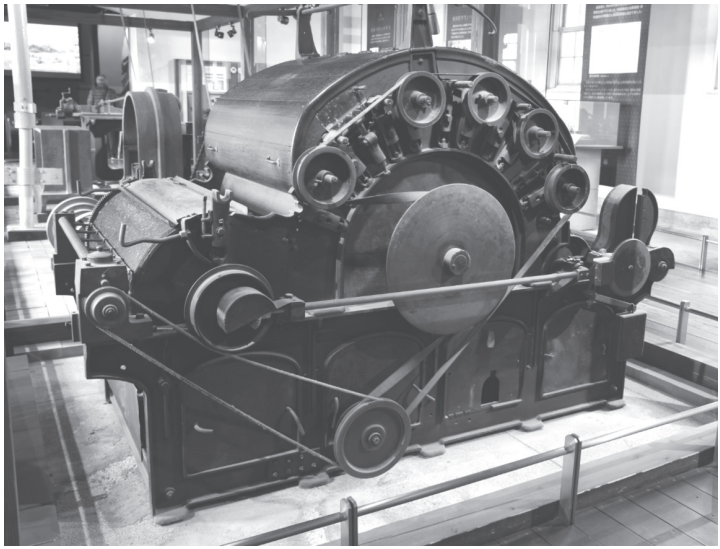
一里余りにある磯の浜の石室という地に工場を卜して据え付けたのに濫觴を発している。（第一、p. 23）

しかし明治 4（1871）年に発布された「官商相成らず」の掟や、明治 10（1877）年の西南戦争の障碍にはばまれて、営業不振に陥り、先行きが怪しくなった。加えて 1897 年 12 月には、藩主忠義の死去が重なったために、創業以来 30 年に及んだ薩摩の紡績業は、遂に閉鎖せざるを得なくなった。当時の薩摩藩とオールダムとの交流を偲ぶよすがとしては、「オールダムのプラット兄弟社」の梳綿機（Carding Machine）が尚古集成館に残されているだけである（画像 1、2）。

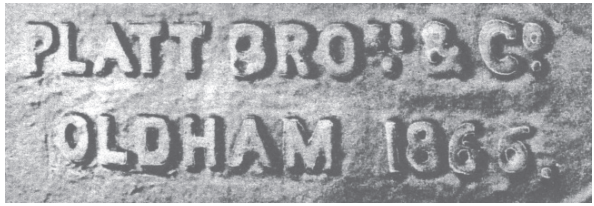
4　渋沢栄一と山辺丈夫のコンビ

日本における最初の紡績業の船出がこのように危機に瀕したときに、紡績業界のパイオニアとして登場したのが渋沢栄一だ。「我国に入用な物は自国にて作らざるべからず」をモットーとしていた渋沢である。彼は当時ロンドン留学中の山辺丈夫に協力を頼み込んだ。いさぎよくそれを受け入れた山辺は在学中のユニヴァーシティ・コレジからキングズ・コレジに転じて一心に機械工学を学び、更に紡績の実業の実地修得を目ざしてマンチェスターへ移った。そこで彼は苦労に苦労を重ねた末にブリッグズという名のブラックバーンの紡績工場主に巡り合って修業を積んだ結果、実業に就けるようになった。ブラックバーンはオールダムと、ボールトンと並んで三大紡績工業地の一つだ。1879 年 9 月 1 日から 5 月に帰朝の途につくまで 1 年足らずの間に、山辺は紡績業を創設できるに十分な知識を修得していた。重ねて細井和喜蔵の述懐に依っていえば、明治 13（1880）年 5 月、山辺丈夫が英国から帰朝し、渋沢栄一ら数人の実業家を発起人として大阪紡績株式会社が創設されたのである。

（注）Asa Briggs, “Manchester, Symbol of a New Age”, *Victorian Cities,* Penguin Books, 1968, PP. 88-105 参照。



（尚古集成館に展示されているプラット兄弟社の梳綿機。所蔵元はカクイ株式会社。尚古集成館の画像を、特別に許可を得て掲載している）



（わが国最初の紡績機に鋳出された制作社名、地名及び年号）

（大手前大学名誉教授）